副葬品その他から見て、非常に畿内的な色彩が強いこの両地域は、埴輪祭祀においても畿内に伍すかのように、房総の他地域よりも一足早く埴輪祭祀を終了させている、という推定である。

6　下総型埴輪の提起する諸問題

以上が房総における埴輪の変遷と分布である。川西編年III期において埴輪祭祀を導入して以来、6世紀の終わりまで約170年前後の間その祭祀は執り行われていたのである。周辺の関東諸地域に比べ導入時期が遅れているが、6世紀後半代の爆発的生産量および使用量はやはり注目に値するものである。これはこの地域における6世紀半ば以降の集落・古墳群形成と同様に、大きな流れの中で捉えることのできる現象である。特に'下総型'と呼ばれる特徴的な埴輪を生産した工人達のあり方は、再度我々の関心を呼び起こすのである。北武蔵や上野における埴輪製作工人集団に比べた場合、技法上の画一性・分布域の広域性にはやはり注目すべきものがある。次節で取り扱うところのその工人集団とものの動きは別に考えるとしても、国造に代表される在地有力者層と工人集団との関係は、当時の当該地域における政治的様相を明確に反映しているのではないだろうか。

ここで、最後に若干の問題提起をしたい。それは下総型埴輪の分布における中心と周縁の両極が見せる二つの問題である。

まず中心における問題である。先にも記したように、'下総型'と呼ばれる埴輪群の分布の中心は印旛沼・手賀沼の周辺域である。この地域は印波国造の主要領域と考えられる。印波国造について考察を加える場合、印旛沼東岸の印旛郡栄町竜角寺古墳群と成田市公津原古墳群をその主要墓域として扱うのが一般的である。が、竜角寺古墳群では数基の古墳から下総型埴輪が検出されているのに対して、公津原古墳群においては現在のところ下総型埴輪は検出されていないのである。成田ニュータウン建設に際し、保存処置のとられた古墳があり、それらの古墳の中に下総型埴輪を持つ古墳がないとは断言できないが、いずれにしてもその数は無か、もしくは限りなく少ないものと考えねばならないであろう。後期古墳においては径20m程度の小型円墳においても埴輪の樹立が見られる例もあるから、埴輪が古墳被葬者の社会的階層性をどの程度反映するものなのかは疑問かも知れない。しかし、同時期の同規模程度の古墳を比較する場合、埴輪の有無はやはり何らかの較差を表わしているのではないだろうか。そのように考えると、印波国造の主要墓域として組み合わせで考えることの多い竜角寺古墳群と公津原古墳群とでは、その性格が異なっていると見た方が良いのではないだろうか。このことは、現段階において何らかの結論を導き出すものではないが、今後新たにこの二古墳群を比較検討する上においては、改めて留意しなければいけないことのように思えるのである。

次に周縁における問題である。下総型埴輪が旧上総地域の市原（上海上国造領域）と山武郡北部（武社国造領域）において検出されているのは、再三述べているとおりである。上海上の

地域が山倉1号墳に代表されるように埴輪において北武蔵との関係を有し、武社地域が埴輪において上野との関係を想定できる。下総型埴輪はその両方の地域に楔形に分布を見せているのである。これは当時の政治状況を考える上において、多くの示唆に富む現象だと思われる。つまり前方後円墳・埴輪祭祀という旧秩序を代表するものが、終末期を迎えるに当たっての崩壊過程の一現象と見ることもできるし、また逆に、7世紀という古墳時代から律令時代に移行する時代に向けての、地方の国造などに代表される在地勢力と畿内勢力との、新たな政治勢力の再編過程を映し出している現象だと見ることもできるであろう。

〈引用・参考文献〉

安藤鴻基他　1978　「千葉県香取郡小見川町三之分目大塚山古墳の長持ち形石棺遺材」『古代』64　早稲田大学考古学会

安藤鴻基　1988　「房総の埴輪について」『千葉県成田市所在竜角寺第101号墳発掘調査報告書』千葉県文化財保護協会

市毛勲　1973　『下総鶴塚古墳の調査概報』　千葉県教育委員会

一瀬和夫　1988　「古市古墳群における大型古墳埴輪集成」『大水川改修にともなう発掘調査概要』V　大阪府教育委員会

荻悦久　1993　「千葉県多古町しゃくし塚古墳出土の有段口縁壷」『古代』96

荻悦久　1994　「千葉県佐原市森戸大法寺古墳の埴輪」『東邦考古』18

川西宏幸　1978　「円筒埴輪総論」『考古学雑誌』64-2　日本考古学会

車崎正彦　1976　「常陸舟塚山古墳の埴輪」『古代』59•60合併号

車崎正彦　1992　「円筒埴輪－関東」『古墳時代の研究　9　古墳III　埴輪』　雄山閣

小嶋芳孝　1983　「埴輪以前の古墳祭祀」『北陸の考古学』26　石川考古学研究会

近藤義郎・春成秀爾　1967　「埴輪の起源」『考古学研究』13-3　考古学研究会

塩谷修　1992　「壷形埴輪の性格」『博古研究』3

白井久美子　1987　「祇園大塚山古墳の埴輪と須恵器」『古代』83

白井久美子・栗田則久他　1992　『房総考古学ライブラリー　6　古墳時代　(2)』(財)千葉県文化財センター

椙山林継他　1986　『内裏塚古墳群測量調査報告書』　千葉県教育委員会

玉口時男他　1982　『永野台古墳』　朝夷地区教育委員会

築比地正治　1982　「高柳銚子塚古墳の埴輪」『宇麻具多』3　木更津古代史の会

轟俊二郎　1972　『埴輪研究』1

内藤晃　1972「瓢塚古墳出土の土器」『土師式土器集成』2　東京堂出版

沼沢豊　1990　「関東－千葉」『古墳時代の研究　11　地域の古墳II　東日本』

橋本博文　1987　「埴輪の出現－関東地方の場合－」『季刊　考古学』20　有山閣

平野功・萩原恭一他　1987　『三之分目大塚山古墳発掘調査報告書』　小見川町教育委員会

平野功　1991　「三之分目大塚山古墳をめぐる諸問題」『千葉文華』26　千葉県文化財保護協会

若松良一　1992　「人物・動物埴輪」『古墳時代の研究　9　古墳III　埴輪』

2節　房総における埴輪の生産と流通

1　はじめに

埴輪は古墳に樹立することのみを目的として生産された葬送儀礼用土製品であり、日常生活用品である土器とは性格が異なる。従って、埴輪の需要と供給の関係は社会総体から見れば極めて特殊な限定されたものであったといってよいだろう。しかし、窯業としての埴輪生産を見た場合、その製作技術は在来の土器生産に根ざし、舶来の須恵器生産の技術をも取り込んだ、古墳時代特有の産業である。よって、埴輪の生産について研究することは古墳時代の手工業生産の実態に迫れると共に生産体制及びその背景にあるものを考察する手段となり得るのである。

これまで主に、埴輪は消費地である古墳出土資料を分析することによってそれを生産した工人や工人集団の把握に努めてきた。しかし、消費地での分析だけでは埴輪生産の実態を復原するには限界がある。例えば、形態や製作技法の分類によって工人数や工人単位が復原されたとしても、それが一つの生産地から供給されたものか複数の生産地から供給されたものかが解らなければ生産体制、生産規模の把握は困難なものとなる。逆に生産遺跡での埴輪の分析は工人数の割り出しから、生産体制、生産規模の復原はある程度できるものと思われる。しかし、これが古墳での需要の何割を担っていたのか、またいくつの古墳に供給していたのか理解することは難しい。よって、生産地と消費地、即ち生産遺跡と古墳との埴輪の総合的な分析が必要なのである。今回は古墳に比べて圧倒的に検出例が少ない埴輪生産遺跡にスポットをあて、これまで遅れていた生産地での埴輪の分析を行うと共に、房総における埴輪の生産と流通に関する総合的な研究の第一歩としたいと考えている。

房総において、これまで発見された埴輪生産遺跡は木更津市畑沢埴輪窯跡と成田市公津原埴輪窯跡の2例にすぎない。よって、これらによって房総の埴輪生産について総体的に述べることは時期尚早であり、ここでは2窯跡で行われていた埴輪生産の実態にせまることを目的とするとともに、消費地である古墳との流通関係を模索することに止めたい。また、消費地である古墳の資料や胎土分析の結果を踏まえて、房総における埴輪の生産と流通の問題について推測的考察を加えたいと思う。

2　埴輪生産体制の復原

埴輪を生産するには以下の諸要素が必要であると思われる。

1．動機＝古墳の築造

2．工人＝技術

3．原材料（粘土・薪・水、等）

4．生産手段（工房・窯等の焼成施設）

5．保管施設（集積地）

このうち、遺跡・遺構として残るのは1・3（粘土採掘坑）・4・5であり、2は遺物即ち埴輪および遺構から推定しなければならない。

埴輪生産遺跡における生産体制や古墳との需給関係が明らかとなっている例は、全国的に見ても少ない。その中にあって、大阪府新池遺跡の調査成果は注目に値するものがある（高槻市教育委員会1993）。房総において確認されている埴輪生産遺跡は、いずれも工房の可能性のある竪穴建物と窯跡とがセットで検出されており、比較的良好な資料となり得ると思われる。ここでは房総において検出されている二つの埴輪生産遺跡において行われていた埴輪生産の実態に迫りたい。

（1）畑沢埴輪生産遺跡

検出遺構は、埴輪窯跡（地下式窖窯）1基、竪穴建物（工房？）7軒及び不整形遺構2基である。埴輪窯跡から出土した埴輪の種類は円筒埴輪、形象埴輪（蓋・盾持ち武人・馬）、それに甕である。円筒埴輪は3条4段以上の房総においては比較的大型品で、外面二次調整はB種ヨコハケのものが若干存在するだけで大半はタテハケである。竪穴建物出土土器の年代観は、須恵器（TK216）、土師器（鬼高式最古段階）より5世紀中葉を示す。供給先に推定されている内裏塚古墳の埴輪は4条5段の円筒埴輪（二次調整タテハケ優位、B種ヨコハケ若干）で、周辺からは人物埴輪が出土している。

安藤氏の速報中にも見られるように、遺跡の発見が宅地造成工事中の不時の発見であったために遺跡の西側に続く斜面に窯跡等が存在したのか否かについては、全く不明である。窯跡には3面の焼成面が見られ、製品はすべて酸化炎焼成されている。現在のところ関東においてもっとも早く窖窯焼成の技術を導入した埴輪生産遺跡である。さて、この3面の焼成面が連続操業によって形成されたものなのか、それとも中断の時期をおきながら3時期にわたって形成されたものなのか－それによって焼成の回数とそれに伴う生産量は大きく変わってきてしまうのである。須恵器窯等の場合、一枚の焼成面は単純に一回の焼成面としてではなく、極端に言えば一生産時期（1シーズン）として理解する場合が多いようであるが、これは埴輪窯にも適用できるのであろうか。畑沢埴輪生産遺跡の場合、窯の構造が完全地下式であることを考慮すれば、補修などによって長期に亘って使用するものではなく、使用可能な期間連続して使用する窯であると考えた方が良いと思われる。従って3面の焼成面は3回の焼成を意味していると考えて良いのではないだろうか。同じ完全地下式の埼玉県生出塚埴輪窯跡群がヤツデ状に連続して窯を構築するのは、単に灰原を共有するためだけではなく、一基あたりの焼成回数に限度があるために、あのような効率的築窯方法をとっていた可能性が高いのである。従って、畑沢埴輪生産遺跡の場合生産量は自ずと限界があり、供給先である内裏塚古墳の需要に応えるためには、他に何基かの窯が必要であることは想像に難くない。

7基の竪穴建物については、報文中にも記したとおり、工人達の工房であることを積極的に実証し得る資料は何も得られていない。しかし、窯跡出土の埴輪に対して与えられる年代と、竪穴遺構から検出されている土器群に対して与えられる年代とは、ほぼ合致するものである。つまり、積極的実証資料が得られなかったことも事実であるが、積極的な否定資料も得られていないのである。このように考えると、報文中では簡単な報告で済ませてしまった遺構Vの小鍛冶関連遺物が改めて注意を惹くのである。出土状況については単に焼土中としか記録されていないのであるが、この遺構に伴う資料であることはまちがいないようである。過去において埴輪生産遺跡の資料整理に関わられた方々や、今後同様の遺跡を調査・整理する方々への注意を喚起しておきたい資料である。

（2）公津原埴輪生産遺跡

既に述べたように、本来存在したであろう埴輪生産関連遺構の全てが把握されている訳ではない。従って、工人集団の単位等、埴輪生産の構造を具体的に解明することは、困難といわざるを得ない。しかし、調査された遺構群の検討の結果、埴輪窯は1基のみではなく複数(3基)存在していたが、それらが同時に操業されていたのではなく、1基毎に操業されていた可能性を指摘することができた。これから見る限り、公津原埴輪生産遺跡の工人集団は概して小規模なものであったといえそうである。

それでは埴輪製作工人の単位について遺構からではなく、埴輪の製作技法から追求することはできないのであろうか。公津原埴輪生産遺跡の普通円筒埴輪には小型と大型の2種類が認められる。この中で口縁部形態に若干の差異がある傾向はあるものの、基本的には形態・製作技法に違いはなく、極めて丁寧に規格的な製品を製作しており、熟練した工人の手によるものであることを窺わせている。

このような資料に対して、器面調整のタテハケのハケ目のパターンの検討による検討方法があげられる。これはハケ目の幅を微視的に観察・計測し、その配列等のパターンからハケ状工具の種類(数)の抽出を試みるものである。確かに公津原埴輪生産遺跡の円筒埴輪は7本／cm単位という極めて規格的なハケ目であるが、微妙な差異が観察され、この方法は一見有効そうにも見えるが、前提としてのハケ目の「パターン」＝工具の数＝工人の単位という単純な構造が成り立つのかが大きな疑問である。実際に今回、工具の種類の同定という面のみの有効性を検討するために普通円筒埴輪の最下段と最上段の資料について行ってみた。しかし、資料自体の歪みや割れが激しく、従ってハケ目の幅にも大きく「狂い」が生じていたこともあるが、この方法で明らかに同一工具によるものと認定できたものはほとんどなく、同一資料の隣接するハケ目でさえ「パターン」が異なることが認められた。これは、ハケ先の摩耗や目づまりもあろうが、何よりもハケ先の接地する部位・角度・強さが常に均一ではないことに起因している。埴輪に関してはこのような微視的な観察の余地はまだあると考えるが、微視的になるほど多くの

条件が組み合わさり、より複雑な様相をなして表出してくることも留意すべきであり、その方法についてはなお検討する必要がある。

以上のように工人集団の単位等、具体的な構成については明らかにできなかったが、いずれにしても工人集団としては窯1基を操業する単位の小規模なものと見ることができそうである。また、台地平坦面に位置するカマドを持つ竪穴遺構は、該当期の一般の集落遺跡を形成している主要な竪穴の型とは異なり、小型な無柱穴の長方形竪穴で、いわゆる「住居跡」というよりも機能的に限定された施設とみなすことができる。このことから公津原埴輪生産遺跡では恒常的な埴輪生産活動が行われておらず、短期的な生産場所であったと思われる。

次に船塚古墳の埴輪を本遺跡のみで生産したのかという問題であるが、供給先の80m級の船塚古墳は未調査であり、埴輪樹立状況は明らかではない。房総には比較検討できるような同時期の埴輪の樹立状況がわかる調査例はほとんどなく、類例による推定復原も困難であることから、埴輪の数量も不明である[1)]。一方、公津原埴輪生産遺跡の埴輪窯跡５１－００１は、他の生産遺跡の埴輪窯跡と比べても大型といってよく、１回に焼成された埴輪の数は、口径30cmの円筒埴輪を焼成部内に並べた場合約120本となる。焼成回数については複数回としかいいようがなく、焼成時の失敗率についても不明であるが、構造的にも整った大型の窯を用いていることや埴輪製作に見られる工人の熟練度に対して、失敗率が特に高かったと思わせる材料は見あたらない。既に指摘されているように大型の埴輪窯を複数を同時にではなく１基単位で操業していく小規模な工人集団の姿が浮かび上がってくることは、むしろ公津原埴輪生産遺跡で船塚古墳に供給された埴輪の大部分を生産していたことを反映しているのではないだろうか。ただし、船塚古墳において表採された埴輪の胎土分析の成果によると、公津原埴輪生産遺跡の埴輪と異なる胎土のものが若干数認められていることから、全く別の生産地(生産遺跡)からも製品が持ち込まれている可能性は残されている[2)]。

いずれにしても公津原埴輪生産遺跡は、船塚古墳造営に伴って成立した埴輪生産施設であったといえよう。

3　生産と消費の問題

(1) 問題点の抽出

生産された埴輪がどのような流通をし、どこの古墳に供給されるのか、即ち生産地と消費地を結びつける作業は極めて困難である。現在のところ、量的に生産地と消費地の資料を比べたら圧倒的に消費地である古墳の資料が多い。まして房総においては生産地が２例しか知られていない。その２例はこれまで述べてきたようにそれぞれ１基の古墳に供給されたものとみてよいと思う。あとは、古墳出土資料を分析して生産地を推定し、供給圏を把握したい。

今回行った埴輪胎土の蛍光Ｘ線分析の結果、31個所の資料がⅠ～Ⅶ群及び、群をなさないも

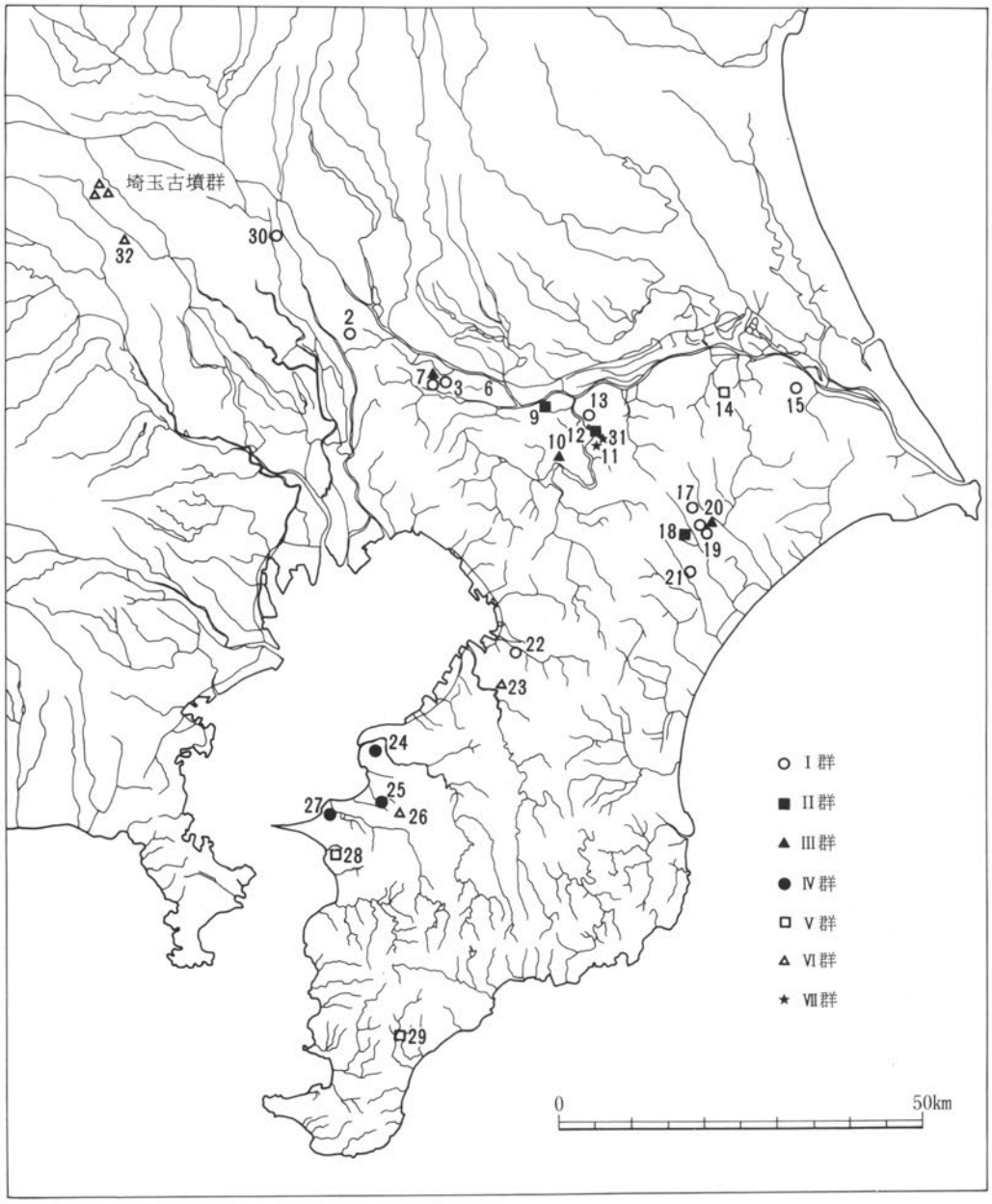
の2個所の計9類に分類された（第127図）。この結果を踏まえ、問題点を抽出し、コメントを加えることとする。

「下総型埴輪」の問題

Ⅰ群、Ⅲ群、Ⅴ群に分類された中に「下総型埴輪」がみられる。Ⅰ群の胎土を持つ埴輪は東葛飾、印旛、山武、市原地域という下総地域に広域分布し、上総北部地域へも分布が及ぶ。Ⅲ群の胎土を持つ埴輪は、東葛飾、印旛、山武地域に分布する。Ⅴ群の胎土を持つ埴輪は佐原市、富津市、小見川町、丸山町というように房総の北部と南部に点在する。また、古墳に目を向ければ、流山市東深井7号墳の胎土はⅠ群に対応し、我孫子市子の神7号墳・横芝町姫塚古墳ではⅠ群・Ⅲ群の双方に対応するものが存在する。従来、下総型埴輪は小規模な巡回型埴輪生産体制が想定されている（轟俊二郎1973）[3]が、胎土のⅠ群への集中や種類の少なさは、むしろ拠点的な生産を示唆するし、工人の巡回を想定するなら胎土の一致は原料である粘土の移動をも考えなければならなくなる。拠点的な生産体制に否定的な見方をするのは埴輪窯の未発見が理由とされるが[4]、窯の構造によっては今後発見される可能性も否定できないのではないだろうか。しかし、工人が粘土を抱えての巡回型生産も可能性は否定し得ない。関東における埴輪生産体制の2様相として巡回型と拠点間移動型が指摘されているが、「拠点間移動型と巡回型の相違は、生産の便と運搬の手段との相克の中で生じた見かけ上の現象にすぎないのかもしれない。」（車崎正彦1992）[5]との指摘もあり、今後下総型埴輪の生産遺跡の発見が切望される。

山倉1号墳の問題

市原市山倉1号墳、木更津市矢那大原古墳と埼玉県鴻巣市生出塚埴輪窯の胎土がⅥ群において一致した。山倉1号墳と生出塚埴輪窯からは極めて類似性の強い盛装の男子像が出土していることが知られている。これまでの解釈ではこの現象を生出塚埴輪窯からの工人の派遣があったものとして説明されてきた。埴輪の作風のみならず胎土まで一致したことは何を意味するだろうか。一つは工人の派遣と共に粘土が持ち込まれたこと、もう一つは製品、埴輪そのものが運ばれたことを意味するものである。鴻巣市と市原市は直線距離にして約80km離れた遠隔地であり、仮に製品の運搬を想定した場合もっとも妥当性のあるルートは、以下のとおりである。生出塚で生産された埴輪は元荒川を船で下り東京湾に出て、そのまま五井に向かって南下する。そして養老川を遡り、山倉1号墳の所在する大坪で荷揚げされる。陸上交通で運搬するのと違い、このような水上交通を利用した運搬の場合、想像するよりも容易に大量の埴輪の運搬が可能なのではないだろうか。しかし、これがそのまま製品ではなく原料の粘土の運搬についてもあてはまることなので、一層の注意を要する。工人が派遣される場合、工人にとって一番心配することは派遣先に良質の粘土があるかどうか、混和材が手に入るかどうかということだろう。よって、胎土の一致は製品の搬入だけでなく、工人の派遣を想定した場合も説明することができるので、この問題はより慎重に対応しなければならない。



Ⅰ群
2．東深井7号墳　3～6．高野山1～4号墳　7．子の神7号墳　13．竜角寺112号墳
15．城山4号墳　17．にわとり塚古墳　19．殿塚古墳　20．姫塚古墳　21．経僧塚古墳
22．小谷1号墳　30．目沼甕簟塚古墳
Ⅱ群
9．小林城出土資料　12．甕塚32号墳　18．木戸前1号墳
Ⅲ群
7．子の神7号墳　10．大木台2号墳　20．姫塚古墳
Ⅳ群
24．高柳銚子塚古墳　25．畑沢埴輪窯　27．内裏塚古墳
Ⅴ群
14．片野23号墳　28．弁天山古墳　29．永野台古墳
Ⅵ群
23．山倉1号墳　32．生出塚埴輪窯
Ⅶ群
11．公津原埴輪窯　31．船塚古墳

第127図　胎土別埴輪分布図

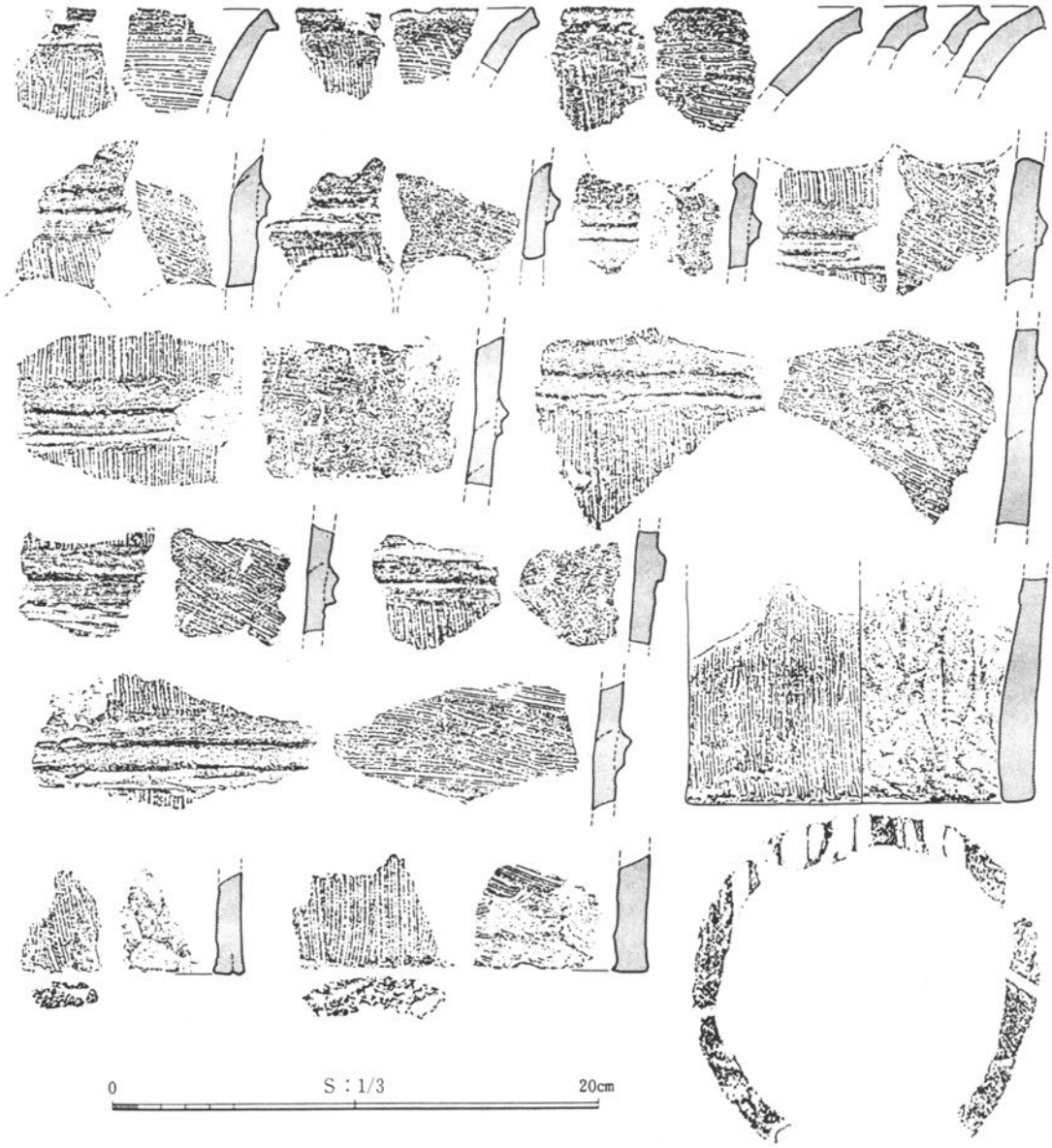
畑沢埴輪窯の問題

富津市内裏塚古墳、木更津市高柳銚子塚古墳とⅣ群として一致している。しかし、考古学的にみた場合、高柳銚子塚古墳の埴輪の方が内裏塚古墳・畑沢埴輪窯に先行すると思われる[6]ので畑沢埴輪窯の製品は内裏塚古墳のみに供給されたと判断する。なお、この胎土の一致は高柳銚子塚古墳の埴輪も在地の粘土で生産されていることを意味し、畑沢近辺に高柳銚子塚古墳に製品を供給した埴輪窯の存在が想定される。しかも、その窯は上総地域で最初に埴輪が製作された場所である可能性が高い。また、畑沢埴輪窯の円筒埴輪は外面２次調整がタテハケが優位であり、B種ヨコハケは数点しか認められない。他地域ではB種ヨコハケが盛行するこの時期に、２次調整のタテハケは特異である。いち早く窖窯焼成の技術を導入しながら、技法は古い段階のものを好んでいるかのようにも思われる。形象埴輪や窖窯焼成など先進的なものと製作技法における後進的なものが混在しており、これを在地色の表出として捉え、窖窯焼成B種ヨコハケを伝播した工人集団の他に在地の工人集団が組織されたものとして理解できないものであろうか。内裏塚古墳に樹立された埴輪は数千本に及ぶものと推測され、この需要を賄うためには畑沢埴輪窯クラスの生産地が十数基は必要となる。しかし、埴輪窯の基数と操業回数は埴輪生産に充てられた期間によって決定されるため、内裏塚古墳に埴輪を供給した畑沢埴輪窯以外の埴輪生産地が未発見の現在、埴輪供給体制まで復原することは難しい。大量の埴輪を生産するには小規模生産体制による長期間操業か大規模生産体制（小規模生産体制の集合体も含む）による短期間操業の何れかであるのだが、古墳造営計画の中でどのように位置付けられていたのだろうか。

公津原埴輪窯の問題

公津原埴輪生産遺跡の製品は、従来より船塚古墳に供給されていたとされてきた（千葉県企業庁1975）。しかし、船塚古墳自体は発掘調査を受けておらず、表採資料に基づく見解でありながら、ながらくお互いに対比できる形で資料が提示されることはなかった。このような状況の中、近年、船塚古墳の表採埴輪資料がかなりまとまって紹介され（永沼1992）[7]、公津原埴輪生産遺跡の資料と比較検討が可能となった。それによると公津原埴輪生産遺跡より船塚古墳の埴輪の方が「明らかに新しい」と評価されている。確かに従来より公津原埴輪生産遺跡で提示されていた資料と比べて、船塚古墳には底径約14.5cmの小型の資料を含んでおり（第128図）、これをもって「新しい」要素とみなされているようであるが、今回あらためて公津原埴輪生産遺跡の資料を整理した中で、断片的ながら同様の底部資料が確認されている。この他、口縁部・突帯形態、整形技法には両者に差異はほとんど認められず、ほぼ同一のものと判断してよいと考えられる。このことは、埴輪の胎土分析においても、船塚古墳と公津原埴輪生産遺跡のみが特異な領域に属している点でも追認されるものである。

以上から公津原埴輪生産遺跡と船塚古墳の受給関係が成立することとなるが、それによって



第128図　船塚古墳表採埴輪（永沼 1992より）

派生する問題点もある。船塚古墳は墳丘形態が前方後方墳とされ、その造営時期を7世紀代に比定されており、このこともこれまで公津原埴輪生産遺跡の受給関係や時期に関する評価に不安定な面をもたらせてきた要因の一つである。今回、両者の受給関係が認められたことから、船塚古墳の造営時期も公津原埴輪生産遺跡の時期、6世紀前半期にまで遡る可能性が強くなり、併せて墳形の再検討も必要となってきたといえよう。

瓢塚32号墳の問題

成田周辺に産地がある可能性が高いと指摘されたII群の胎土を持つ一群である成田市瓢塚32

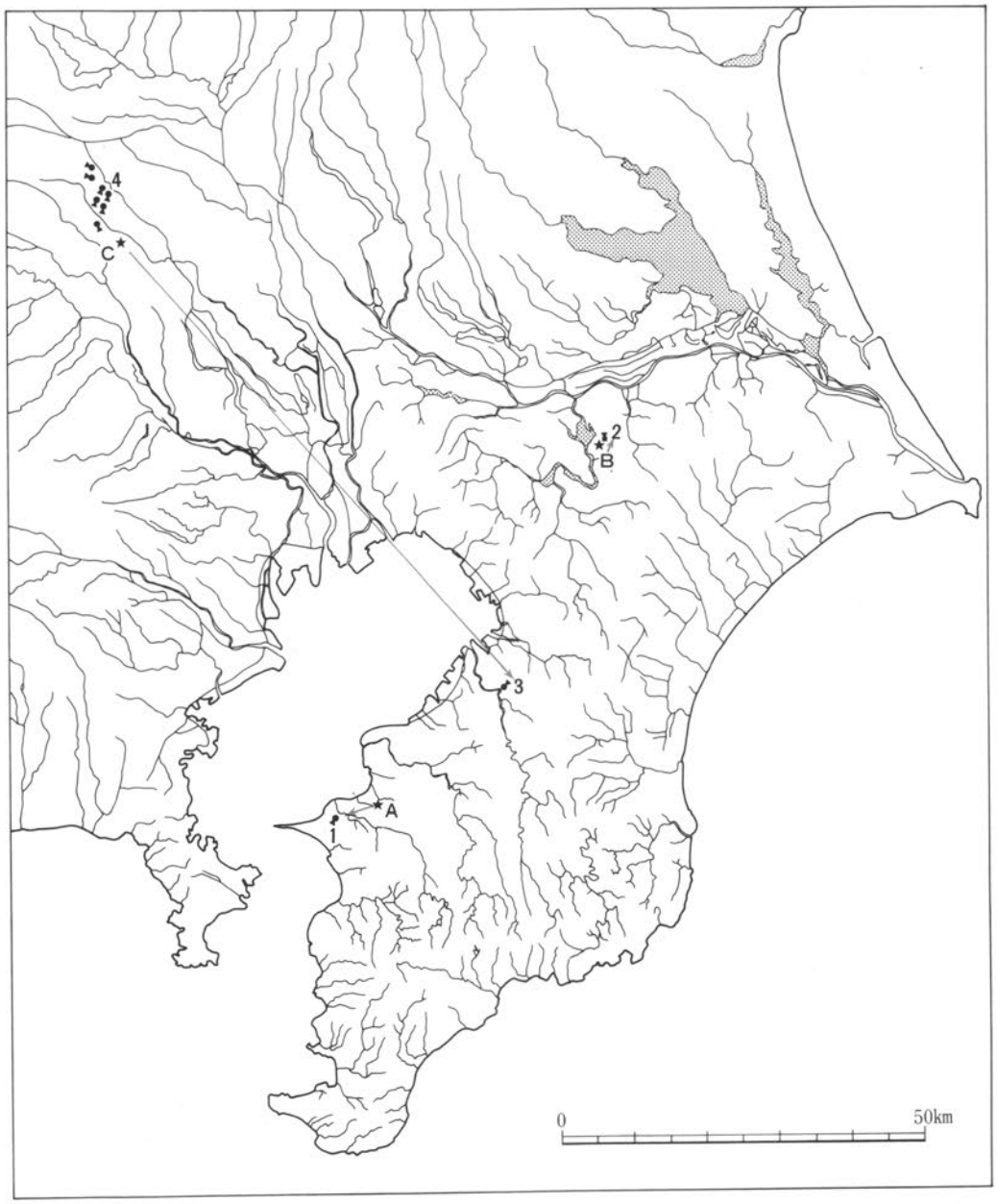
号墳の埴輪は、古墳の周溝に長方形状に本来は密集して立て並べられたと想定される状態で出土している。これらは明らかに墳丘から転落したものではなく、原位置を保っている。調査担当者は、これを単なる埴輪集積地としてではなく、中心に巫女の形象埴輪があることから祭祀的なものとみているようである。何に対する祭祀なのか明らかにされていないが、その前に幾つか検証しなければならない問題があるように思われる。第1点は、この埴輪が瓢塚32号墳に伴うものかどうかである。まず、古墳については主体部に石枕を有し、いわゆる「和泉期」の竪穴住居跡の上に古墳が造営されている。これに対して埴輪群は特に掘り込みなどは伴わず、周溝底面から出土していることから古墳造営期と大きな時間差はなく、埴輪の特徴から見ても5世紀後葉から6世紀初頭の年代を示すものとみられているので、時期的には問題はないようである。第2点は、なぜ通常の埴輪列のように墳丘に樹立しなかったのかである。集積された埴輪は埋設されておらず、周溝底面に置かれたままであったと考えられる。この状態が目的とする行為の最終段階であったのか、過程の段階であったのか注意を要するところである。第3点は、埴輪の置き方が異常に密集していることである。よって、この集積の性格については、これが祭祀に関わるか、関わらざるかを問わないまでも、出荷前の置き場、樹立前の置き場、運搬中の仮置き場という移動の過程での状態とする見方と、方形集積という目的のための結果としての状態とする見方の二者が考えられる。しかし、埴輪自体が祭祀のためのものであった以上、その生産・運搬の過程においても祭祀的な取り扱いを受けていた可能性は強く、よって、その配列に祭祀的な要素が認められるとしても、その祭祀の具体的内容が明らかにされない限り、それが即ち「目的」であったとする根拠となり得ない。むしろ、瓢塚32号墳の規模に対応するような推定される埴輪の数量、埴輪の形態等の特徴(特に小型なこと)から、古墳に伴う「仮置き」的な色彩が濃い。埴輪集積地としては群馬県太田市駒形神社遺跡、鳥取県東伯郡羽合町長瀬高浜遺跡が知られるが、瓢塚32号墳の例も今後埴輪集積遺構として検討に値するものとなろう。

(2) 受給関係の特質

房総において埴輪の需給関係が明らかになったのは、畑沢埴輪窯と内裏塚古墳、公津原埴輪窯と船塚古墳、生出塚埴輪窯と山倉1号墳の3例である(第129図)。

畑沢埴輪窯は内裏塚古墳の北東約5kmに所在し、窯は3回の操業を行っている。しかし、内裏塚古墳の需要をすべてまかなったとは考えられないので、内裏塚古墳造営のために構築された埴輪窯の内の一つである可能性が高い。

公津原埴輪窯は船塚古墳に約100mと近接して所在する。操業回数は不明だが、埴輪片の焼台利用を考慮すると少なくとも2回は操業したと思われる。供給先の船塚古墳では公津原産以外の胎土をもつ埴輪も存在することから、船塚古墳に供給した埴輪窯の内の一つとみた方がよいだろう。



埴輪生産遺跡		古　墳
A．畑沢埴輪窯跡（木更津市畑沢）	5世紀中葉 / 5km →	1．内裏塚古墳（富津市二間塚）
B．公津原埴輪窯跡（成田市吾妻）	6世紀前葉 / 0.1km →	2．船塚古墳（成田市赤坂）
C．生出塚埴輪窯跡（埼玉県鴻巣市）	6世紀後葉 / 80km →	3．山倉1号墳（市原市大坪）
	→	4．埼玉古墳群（埼玉県行田市）

第129図　埴輪供給関係図

上記の古墳と埴輪窯の需給関係は、一つの古墳における需要に対して複数の埴輪窯から供給されるという、いわば1古墳多窯対応の状況の一端を示している。この状況の背景には、集中して埴輪窯を構築したり、一個所から大量に粘土を採掘したりすることのできる地理的・地質的要因と埴輪製作工人集団の組織的な要因が関与していることが読み取れる。これらの要因によって5世紀中葉ないし6世紀前葉の房総において、畑沢埴輪窯や公津原埴輪窯にみられる小規模生産体制による埴輪の生産が大規模古墳の周辺で数カ所同時に行われていたものと思われる。しかし、これらの埴輪生産は継続しては行われず、その技法的系譜も追うことはできない。現時点では、畑沢埴輪窯は内裏塚古墳、公津原埴輪窯は船塚古墳へのみ埴輪を供給することを目的として存在した埴輪生産地と考えられる。

生出塚埴輪窯と山倉1号墳の需給関係は特殊である。埼玉県鴻巣市に所在する生出塚埴輪窯と市原市に所在する山倉1号墳とは直線距離にして80kmも離れている。作風、製作技法の類似と胎土の一致によって需給関係を想定しているが、これを製品の移動とみるのか粘土ごと持ち込んだ工人の移動とみるのかは前述のとおり即断できない。生出塚埴輪窯は埼玉古墳群に埴輪を供給しており、製品や工人の他地域への移動にはその背後に埼玉古墳群を造営した地域首長の政治的関与がうかがえる。また、興味深いことに埼玉古墳群中の将軍山古墳（6世紀後半）の横穴式石室の石材に房州石が使用されているという現象がある。これは周辺の若大子古墳や小見真観寺古墳にもみられる現象である[8]。6世紀後半の武蔵と総の関係は非常に親密だったようである。この関係のなかで持ち込まれたのが山倉1号墳をはじめとする武蔵型の埴輪なのであろう。

埴輪の需給関係にはいくつかのパターンがあると思われる。需要と供給のバランス即ち古墳の規模と生産地の規模の対応関係である。

埴輪需給関係パターン
A．1古墳1生産地型 小規模古墳に対して小規模生産地が対応する。 B．1古墳多生産地型 大規模古墳に対して多数の小規模生産地が対応する。 C．多古墳1生産地型 多数の古墳に対して1つの大規模生産地が対応する。

生産地から見た場合の供給体制は、上記のA・BとCに分類される。これは生産体制における集約度の差と工人の組織のされ方の違いによって生じるものであり、一つの生産地から何か所の古墳へ埴輪が運ばれるかということである。固定供給型は特定古墳の造営のために築かれた埴輪生産地であり、一般的に操業期間が短く、小規模である。分散供給型は複数の古墳に埴

輪を供給することから操業期間も比較的長く、大規模である。

埴輪供給体制パターン
Ⅰ．固定供給型 上記A、Bの違いはあるが、特定の古墳にのみ埴輪を供給する。ⅠA型は生産地と古墳が1対1の対応をし、ⅠB型は多対1の対応をする。畑沢埴輪窯、公津原埴輪窯はⅠB型に該当する。 Ⅱ．分散供給型 上記Cのとおりだが、供給範囲が古墳群単位のものや地域を越えるものなどがある。生出塚埴輪窯が該当する。

ここで、再び「下総型埴輪」の「巡回型埴輪生産体制」について考えてみたい。巡回型を想定した場合、その供給体制はⅠA型（1古墳1生産地の関係で固定供給）になると思われる。胎土分析の結果、下総全域及び上総地域にまで分布を示すⅠ群と東葛飾、印旛、山武に分布を示すⅢ群、佐原市、小見川町に分布を示すⅤ群の3群しか胎土の種類はない。また、一つの古墳で2種類の胎土を持つ埴輪を有している例（横芝町姫塚古墳）もある。純粋に一つの古墳に供給することを目的として古墳の近くに移動して埴輪を生産したとすれば、もっと胎土の種類が多様化するのではないか。これは粘土を持ち込んで埴輪生産にあたったと解釈しなければ巡回型を肯定できない。下総地域において採取できる粘土が均質的なものであれば、この考えは否定されるのであろうが、下総地域においても計6種類の胎土を認識しているので、その可能性は低いと思われる。よって、「下総型埴輪」は巡回型生産の可能性を否定し得ないまでも、東葛飾、印旛、山武地域におけるある程度の拠点的生産（一個所の集中生産ではなく、小地域でのまとまりを持った生産）を想定でき、また、それを統括するような工人組織の発達を考えることができそうである。このことが「下総型埴輪」という形態の埴輪の下総地域における広域分布と胎土の種類の少なさ、小地域間の埴輪の相互補塡の実態を説明してくれるのである。従って、「下総型埴輪」の供給体制はⅡ型（一生産地から多古墳へ分散供給）、しかも古墳群単位を越えて他地域へも及んでいたと解釈できないだろうか。

（3）生産の特質

房総においてはじめて埴輪を受容したのは、5世紀前葉、香取郡小見川町三之分目大塚山古墳の川西編年Ⅲ期のものである。この埴輪は、焼成時の黒斑を有し、二次調整にタテハケを施す点で茨城県石岡市舟塚山古墳の埴輪と共通した技法を持っていることが知られている。房総においてこの他にⅢ期の埴輪を持つ古墳は今のところ発見されていない。印旛郡印西町鶴塚古墳の器台形及び壺形の「埴輪」は5世紀初頭に位置付けられるが、これを埴輪とするか否かは埴輪の定義に関する問題である。「仮器化した古墳祭祀用土製品」という大きな枠組みにおいて

は埴輪と認定し得るが、一般的には埴輪からは除外されるものである。

畿内において川西編年III期は外面二次調整にB種ヨコハケを施し、透孔形は円形、焼成は野焼きによることを特徴としている。三之分目大塚山古墳の埴輪は、二次調整にタテハケを用い、透孔は円形と方形で構成されている。調整方法及び透孔の形態は川西編年II期の特徴を示すものであり、技法の伝播の遅延を感じる。

次に登場するのが、東京湾沿岸の上総地方西部地域であり、川西編年IV期の窖窯焼成の埴輪である。木更津市高柳銚子塚古墳、木更津市矢那大原古墳は外面二次調整にB種ヨコハケを施し、高柳銚子塚古墳、矢那大原古墳とも採集資料のほとんどのものにB種ヨコハケが観察された。富津市内裏塚古墳、木更津市畑沢埴輪窯跡は外面二次調整にB種ヨコハケが認められるものの、極めて少数であり、大半はタテハケを施している。また、円筒埴輪の同一個体中において二次調整を省略する段がみられるものも存在する。木更津市清見台A－4号墳[9]は2条3段構成の円筒埴輪でB種ヨコハケも見られるが、粗雑化している。透孔形は円形と逆三角形があり、透孔形の古相と技法の粗雑化による新相とが混在している。富津市富士見台2号墳[10]は3条4段構成で最上段のみ×状ハケを施す。同様の形態の埴輪は市原市菊間手永台古墳群でも確認されている[11]。

このようにみてくると、房総において川西編年III・IV期に併行すると思われる埴輪は、調整技法や透孔形において古い要素を残存させている。その一方、窖窯焼成をいち早く導入した点や二次調整を省略する傾向は先進的である。技法の伝播とその受容について慎重な分析を行う必要がありそうだ。窖窯焼成やB種ヨコハケに代表される技法の画一化は埴輪の大量生産を志向していると考えられ、畿内における巨大前方後円墳の造営とも期を一にしている。確かに畿内及び東海では、須恵質埴輪がみられるように須恵器と埴輪が併焼され(併焼型)、須恵器工人と埴輪工人の結びつきが深い。極端にいうならば埴輪は須恵器の一器種化しており、祭祀使用の色彩の強い初期須恵器の性格を考慮すれば、納得できる状況である。これに対して関東においては本来の意味での「須恵質埴輪」は検出されておらず、埴輪工人と須恵器工人との積極的な交流は認めがたく(個別焼成型)、この状況を併焼型に比して分業化が進んでいたことを示しているととらえている(橋本博文1987)[12]。房総においても川西編年IV期段階の畑沢埴輪窯、V期の公津原埴輪窯においては窖窯焼成以外に須恵器製作技法の影響は認められない。現在のところ5世紀段階の須恵器窯は未発見であり、房総における初期須恵器の生産については未知の部分が多い。市原市草刈遺跡で出土したTK208型式期の須恵器手法の土器は、須恵器の技法で作られながら酸化炎焼成され、赤彩されている。性格は同一とは思われないが、窖窯で焼成されながら酸化炎焼成され、赤く仕上げることを志向した埴輪と何か通じるところがあるように感じられる。

山本靖氏は常陸地域の受容期の埴輪に二次調整タテハケが施されているのを、古い特徴の残

存として捉えるのではなく、畿内の直接的な影響のもとに成立したものといえないため上毛野地域から二次的に波及してきたものとしている(山本靖1991)。その傍証として太田市別所茶臼山古墳の円筒埴輪の外面二次調整に施されたB種ヨコハケとタテハケの割合が5％と95％であることを指摘し、上毛野地域のなかでも南東部の影響を強く受けているものとしている[13]。この観点で房総の埴輪を見ると、下総地域の三之分目大塚山古墳に関してはこのことが当てはまるかもしれないが、上総地域における受容期の埴輪は高柳銚子塚古墳や矢那大原古墳において二次調整B種ヨコハケの割合が高いため、上毛野東南部地域の影響は見られない。むしろ、これらは誉田御廟山古墳（応神陵）との類似性があり、畿内の直接的な影響のもとに成立した感が強い。しかし、上総地域の第2段階に想定されている内裏塚古墳・畑沢埴輪窯の埴輪には二次調整タテハケの割合が高くなる。これは上記の上毛野地域の影響を感じられるが、時期的に矛盾が生じるため、この現象を畿内の影響を多少残しながら埴輪生産において在地化が始まったものと理解しておきたい。

なお、遠江地域では受容期の埴輪を出土する静岡県松林山古墳以降5世紀前半までは、畿内から招来された工人にせよ在地で臨時に集められた工人にせよ畿内に忠実な製作上の強い規制が守られていることが指摘されている(鈴木敏則1993)。さらに5世紀中葉の堂山古墳の出現に際し、畿内で考案された最新の窖窯焼成のB種ヨコハケの技法を採用し、当然製作者も畿内から招かれた工人と推定された。ところが、野焼きの粗いA種のハケをもったものも存在したため、別の在地色の強い工人集団の存在を指摘し、遠江における5世紀中葉の埴輪生産の画期を「窖窯焼成B種ヨコハケと言った新技術の一早い導入と、埴輪需要の高まり、そして在地の埴輪製作工人集団の成立である。」としている[14]。

このような画期が上総地域西部にもあったのではないだろうか。畿内の強い製作上の規制、管理を受けて製作された高柳銚子塚古墳、矢那大原古墳の埴輪、畿内との関係を持ちながら在地色を発芽させた内裏塚古墳の埴輪、奇しくも内裏塚古墳に供給した畑沢埴輪窯において窖窯焼成B種ヨコハケとタテハケの埴輪が混在することがこのことを如実に物語ってくれよう。5世紀中葉における埴輪生産の画期は上総地域においても存在したのである。

房総における埴輪生産の特質は、下総地域と上総南西部地域という二つの「埴輪文化圏」が存在することにある。下総地域では常陸、上毛野地域の影響の下に受容、展開し、畿内では埴輪の消滅する6世紀後半に盛行する。特徴的な「下総型埴輪」も常陸の影響の下に成立したといわれ、下総地域は受容からずっと常陸の影響を受け続ける畿内の規制、管理から外れた地方色の強い「埴輪文化圏」なのである。一方、上総南西部地域では窖窯焼成B種ヨコハケの導入という畿内の直接的な影響の下に埴輪を受容し、在地色を出しながら展開する。5世紀後葉にに位置付けられる木更津市清見台A－4号墳では、B種ヨコハケを持つ2条3段の円筒埴輪がみられ、武蔵との関係の始まりが指摘されている[15]。また、下総地域、上総北東部地域(武社国

造領域）で埴輪の盛行する6世紀後葉において、木更津市金鈴塚古墳には埴輪が存在せず、馬来田、須恵国造領域での6世紀第4四半期に位置付けられる埴輪が確認されないことから、その終焉においても畿内と時期を同じくする。よって、上総南西部地域は受容から消滅まで一貫して畿内の影響下に置かれている畿内色の強い「埴輪文化圏」である。そして、二つの「埴輪文化圏」の間に位置する上総北西部地域では受容期においては畿内色が強いと思われるが、6世紀後半段階に「下総型埴輪」や「武蔵型埴輪」が貫入的に入って来る。これを二つの「埴輪文化圏」の間の現象として捉えるものとする。また、東葛飾地域では「下総型埴輪」と「武蔵型埴輪」が双方認められる。これは地理的要因によるものであろう。

生産の特質について、形態や技法からみた系統的な面に重点をおいて述べてきたが、ここで公津原埴輪生産遺跡の項目で触れた埴輪の胎土について改めて考えてみたい。公津原埴輪窯で生産された埴輪の胎土には、破砕された花崗岩が混和材として入っている。特に形象埴輪には大粒のものが観察された。花崗岩は、工房においても礫片として出土しているので、工房で破砕し、粘土に混入しているのは明らかである。ここで問題なのは、花崗岩が在地では調達できない岩石であり、搬入品であることが自明のことだということだ。公津原埴輪生産遺跡の工人達は何処で花崗岩を混和材に使用することを習得したのだろうか。また、何処から花崗岩を調達したのだろうか。しかし、他の地域で意識的に破砕した花崗岩を胎土に混入している事例があるのかどうかは未確認である。ここでは、製作技法以外の面から工人の系統や伝播のルートを探る手段の一例として胎土の作製方法も考慮する価値があるのではないかということを指摘するに止めたい。

（4）消費の特質

埴輪を消費するという言葉が適当であるかどうかわからないが、基本的に古墳造営計画に基づいて必要量を算定し、生産、貢納させたものだと思われる。しかし、埴輪は、古墳における必要十分条件では無かったようで、埴輪を持たない古墳も多数存在する。千葉県においても確認されている8,665基の古墳[16]の内、埴輪が確認されている古墳は1割に満たないのである。埴輪を持っている古墳が少ないことが消費の特質の第1点かもしれない。

房総において古墳に埴輪が樹立されるようになるのは、5世紀以降であり、前期古墳からの出土例はなく、関東地方の他地域よりも受容が遅れる。しかし、古墳の造営自体は神門古墳群や滝ノ口向台古墳群、高部古墳群といったように3世紀後半に畿内と時期を違えず出現している。畿内においてでさえ埴輪を持つ古墳と埴輪を持たない古墳が存在することから、埴輪は古墳を造営すること（墳形・規模）と異なった規制が働いていたのではないかと想像する。房総においても古墳の墳形・規模と埴輪の有無はあまり関係が無さそうである。埴輪の有無が葬送儀礼の形態の差によるものなのか、埴輪自体、葬送儀礼においてあまり存在が重要視されないものなのか、判断がつきかねるところである。

埴輪は古墳にいつ樹立されるのか。水野正好氏は「死者の埋葬儀礼がすべて完了した後、一斉に墳丘全体に各埴輪が配置されていくケースが一般的であったと説くことができるであろう。」（水野正好1987）としている[17]。すると、一斉に樹立できるように埴輪をストックしておく必要があり、保管庫ないし集積地の存在が想定できる。集積地については群馬県駒形神社埴輪窯跡、鳥取県長瀬高浜遺跡の2例が知られるが、駒形神社埴輪窯跡のものは生産地における出荷前の集積地であり、長瀬高浜遺跡のものは生産地ではないようなので樹立前の集積地である可能性が高い。埴輪集積地は出荷前と樹立前ではそれを管理する主体等、性格の相違があると思われるが、古墳造営について組織的な面からの解明をしなければならない問題である。前述した成田市瓢塚32号墳の埴輪集積は、消費地における埴輪の樹立前の姿を遺しているのかもしれない。古墳の周溝部分の窪みに埴輪を用意して、埋葬まで完了したが、何かの要因で墳丘に埴輪を樹立することができなかったのだろう。このことを前提とすると、埋葬が完了するまでに樹立すべき埴輪は古墳の傍らに用意されていることになる。古墳の造営と埴輪の生産、樹立の時期については常識的にほぼ同時であると考えられているが、このことがそれを実証する根拠になるのかもしれない。

房総における地域的な特徴として畿内色と在地色について前述したが、畿内色の強い上総南西部地域ではB種ヨコハケに代表される製作技法や消滅時期など一貫して畿内の規制・管理下におかれている生産体制によって製作された埴輪が消費され、どちらかというと生産地主導型の消費形態が想定される。一方、在地色の強い下総地域では成田市高野1号墳のように3条4段の埴輪に凸帯を1条付加したような4条5段の特注品的埴輪が存在するものがある[18]。こちらは消費地主導型の生産形態が想定される。

埴輪は生産地から消費地である古墳までどのような方法で運搬されたのか考古学で証明することは難しい。一般に数百個から数千個消費される埴輪を運ぶには計画的な輸送体制が必要であり、交通路（陸上・水上）、運輸手段（人担・駄送・車載・舟運）も整っていたものと思われる。しかし、房総においては古墳時代に遡る道路遺構は未確認であり、具体的な流通経路を復原するには至らない状況である。

4　おわりに

埴輪は、吉備地方の特殊器台形土器に起源を持つ円筒埴輪[19]と、形象埴輪で構成される土の焼き物による造形である。手工業生産による窯業製品である埴輪は、古墳時代に畿内から地方へ伝播し、房総においても5世紀前葉に出現している。埴輪が地方に伝播するのは、畿内的古墳祭祀及び葬送儀礼が伝播することを意味し、直接的には製作技術が伝播することを意味する。技術の伝播は人を媒体としてなされるものであり、埴輪製作工人の移動が埴輪の地方伝播をもたらすのである。しかし、伝播の仕方は一様ではなく、畿内から直接伝播するもの、二次的に

伝播するもの、畿外から伝播するものがあるようだ。また、技術伝播の媒体となる工人の移動についても畿内の工人が地方へ赴く場合と地方の工人が畿内へ行って技術を持ち帰る場合とがあるように思われる[20]。

では、房総における埴輪の生産と流通について、本節で述べた要点を列挙してまとめとしたい。

1．木更津市畑沢埴輪窯跡は富津市内裏塚古墳に埴輪を供給している。
2．成田市公津原埴輪窯跡は成田市船塚古墳に埴輪を供給している。
3．市原市山倉1号墳の埴輪は埼玉県鴻巣市生出塚埴輪窯跡から供給されている可能性が高い。
4．畑沢埴輪生産遺跡・公津原埴輪生産遺跡にみられる生産規模は2単位4、5人程度の工人による小規模なものであり、操業期間は短く継続しない。
5．畑沢埴輪窯で製作された円筒埴輪は外面二次調整にB種ヨコハケを有するものよりもタテハケを有するものが多く、畿内の規制から外れた在地色が認められ、在地の埴輪工人が組織されていた可能性が高い。
6．公津原埴輪窯で製作された形象埴輪の胎土には、花崗岩粒が顕著に認められ、円筒埴輪の胎土にみられるスサ状の繊維質の存在と共に混和材から工人の系譜を検討できる可能性がある。
7．「下総型埴輪」は今のところ巡回型生産か拠点型生産か結論は出せない。
8．房総の埴輪の系譜は畿内直系のものの他に常陸系、武蔵系のものがある。
9．成田市瓢塚32号墳の埴輪の出土状況は古墳に樹立する前の状況を示していると思われ、埴輪集積地である可能性が高い。
10．埴輪窯としての窖窯の採用は、埴輪生産の場所の選定と固定化を招来した[21]と、されるが房総においては定着的な生産地は確認されておらず、これが古墳群の規模と関係するものか、地質に関係するものなのか今後の研究に委ねたい。

今回は畑沢埴輪生産遺跡、公津原埴輪生産遺跡の資料の公開を主に、房総の埴輪を生産と流通という観点から述べてきたが、論点が円筒埴輪に偏ってしまい、形象埴輪について十分な検討がなされなかった。今後は形象埴輪の意匠、製作技法を含め、埴輪工人集団の動向を把握することを課題としたい。

最後に、かつて当文化財センターにも籍をおかれていた山口直樹氏が亡くなられてから、間もなく一年がたとうとしている。本紀要の作成を始めた頃、当時千葉県立房総風土記の丘におられた氏からは、胎土分析のための試料の借用方法・保管方法について、多くの有益な御助言を得た。あらためて御冥福をお祈りしたい。

註

1）船塚古墳の現存墳丘はかなり改変されており、正確なデータはないが、墳丘の外周距離は約240m程度と推定され、大胆に推測することが許されるとすると、単純に50cm間隔単位で墳丘外周に全周させたとした場合、埴輪は約480本となる。この他に墳頂外周や主体部周辺にも樹立されていたと考えるべきであろう。

2）公津原埴輪生産遺跡の南約400mの地点(現在の成田市赤坂)、支谷の最奥部斜面において多量の埴輪が出土したという伝聞があるが、真偽のほどは確認できなかった。

3）轟　俊二郎　1973　『埴輪研究』第1冊P.99「少なくとも下総においては、工人達は各地を歩きまわって製作していたとしか思えない。従って下総に関する限り、埴輪の供給圏は工人の行動圏と同義である。」

4）3）に同じ「多くは必要とする古墳の近くに窯を築いて製作したのであろう。特に下総では、未だに埴輪窯はほとんど発見されていない。それは、大規模な生産地がなかったことを示唆していると考えてよい。」

5）車崎正彦　1992　「2埴輪の種類と編年　1円筒埴輪　B関東」『古墳時代の研究』第9巻　古墳Ⅲ　埴輪

6）本章1節「房総における埴輪の変遷と分布」参照

7）永沼律朗　1992　「印旛沼周辺の終末期古墳」『東国における古墳の終末（本編）』国立歴史民俗博物館研究報告第44集

8）増田逸朗　1985　「埼玉古墳群と円筒埴輪」『埴輪の変遷―普遍性と地域性―』第6回三県シンポジウム

9）清見台古墳群発掘調査団　1968　『清見台古墳群発掘調査報告』

10）君津郡市文化財センター　1987　『富士見台遺跡』

11）近藤敏氏の御教示による。

12）橋本博文　1987　「関東地方の埴輪」『季刊考古学第20号』特集埴輪をめぐる古墳社会

13）山本　靖　1991　「関東地方における埴輪祭式の受容」『研究紀要第8号』　埼玉県埋蔵文化財調査事業団

14）鈴木敏則　1993「静岡県内のB種ヨコハケをもつ埴輪」『静岡県考古学研究』№25

15）萩原恭一　1985　「千葉県における埴輪の様相と展開」『埴輪の変遷―普遍性と地域性―』　第6回三県シンポジウム

16）千葉県文化財センター　1992　『房総考古学ライブラリー6』古墳時代（2）

17）水野正好　1987　「埴輪の意義」『季刊考古学第20号』特集埴輪をめぐる古墳社会

18）宇田敦司氏の御教示による。

19）近藤義郎・春成秀爾　1967　「埴輪の起源」『考古学研究』第13巻第3号

20）大阪府新池遺跡において東海系土器や鬼高式土器が出土しており、各地からの埴輪生産への関与や技術の研修を想定することが可能であるとしている（笠井敏光　1992　「5　埴輪の製作技法と生産　2　埴輪の生産」『古墳時代の研究』9　古墳Ⅲ埴輪）。

21）吉田恵二　1973　「埴輪生産の復原」『考古学研究』第19巻第3号

〈引用・参考文献〉

川西宏幸　1988「円筒埴輪総論」『古墳時代政治史序説』

石野博信ほか編　1992　『古墳時代の研究』第9巻　古墳III　埴輪

山本　靖　1991　「関東地方における埴輪祭式の受容」『研究紀要第8号』　埼玉県埋蔵文化財調査事業団

鈴木敏則　1993「静岡県内のB種ヨコハケをもつ埴輪」『静岡県考古学研究』№. 25

橋本博文・水野正好ほか1987　『季刊考古学第20号』特集埴輪をめぐる古墳社会

千葉県文化財センター　1990　『房総考古学ライブラリー5』古墳時代（1）

千葉県文化財センター　1992　『房総考古学ライブラリー6』古墳時代（2）

群馬県考古学談話会ほか　1985　『埴輪の変遷－普遍性と地域性－』第6回三県シンポジウム

吉田恵二　1973「埴輪生産の復原」『考古学研究』第19巻第3号

宮内庁書陵部　1989　『出土品展示目録埴輪Ⅰ』

轟　俊二郎　1973　『埴輪研究』第1冊

坂　靖　1988　「埴輪文化の特質とその意義」『橿原考古学研究所論集』第8

永沼律朗　1992　「印旛沼周辺の終末期古墳」『東国における古墳の終末（本編）』国立歴史民俗博物館研究報告第44集

古代を考える會　1993　『古代を考える』54　埴輪製作所遺跡の検討

高槻市教育委員会　1993　『新池』

千葉県企業庁　1975　『公津原』

写 真 図 版

公津原埴輪生産遺跡

図版 1

朝顔形埴輪 1

朝顔形埴輪 2

瓢塚32号墳出土馬形埴輪

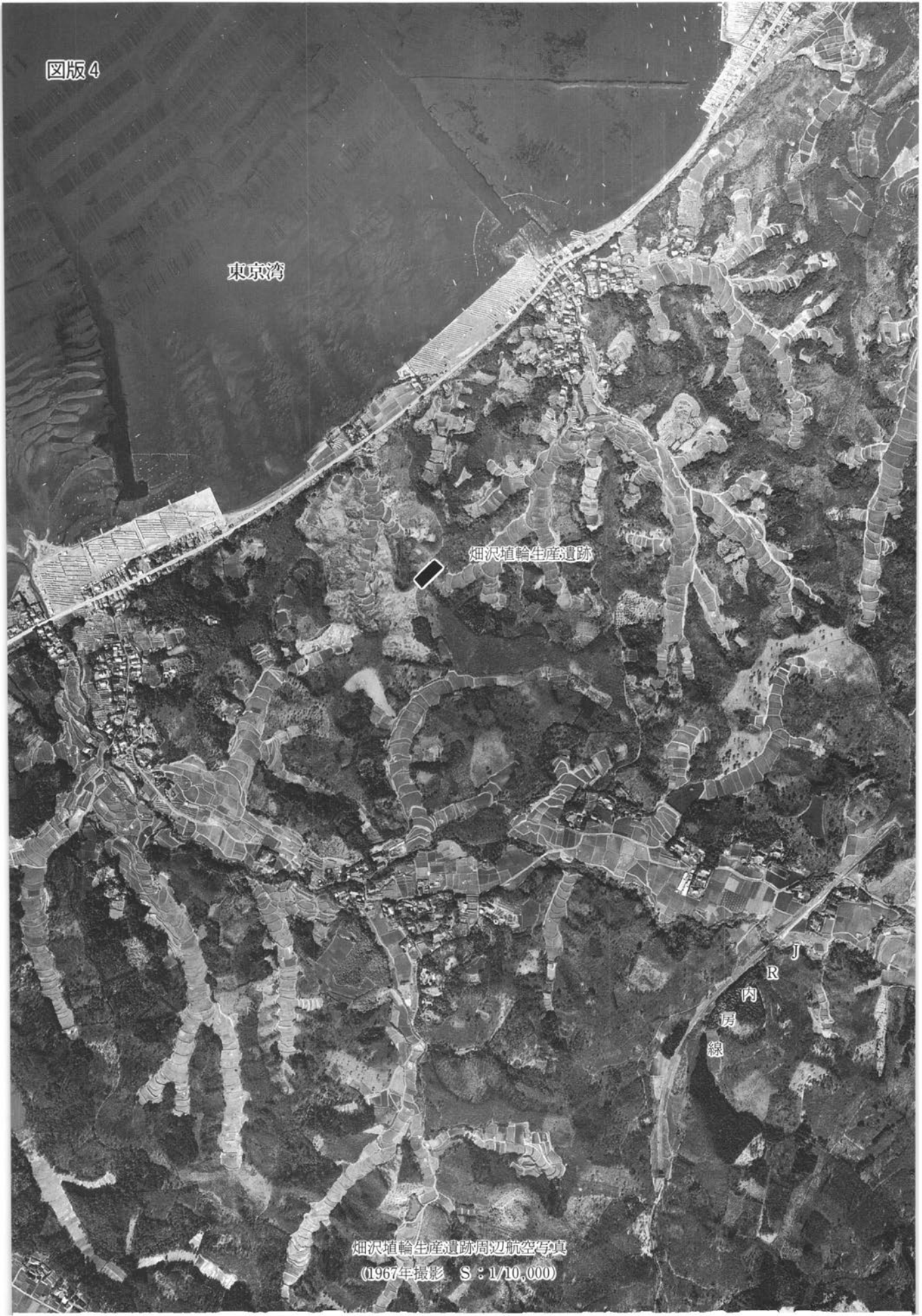
馬形埴輪脚部「蹄」

瓢塚32号墳出土馬形埴輪

写 真 図 版

畑沢埴輪生産遺跡

図版4



畑沢埴輪生産遺跡周辺航空写真
(1967年撮影　S：1/10,000)

遺跡遠景

窯跡付近調査風景

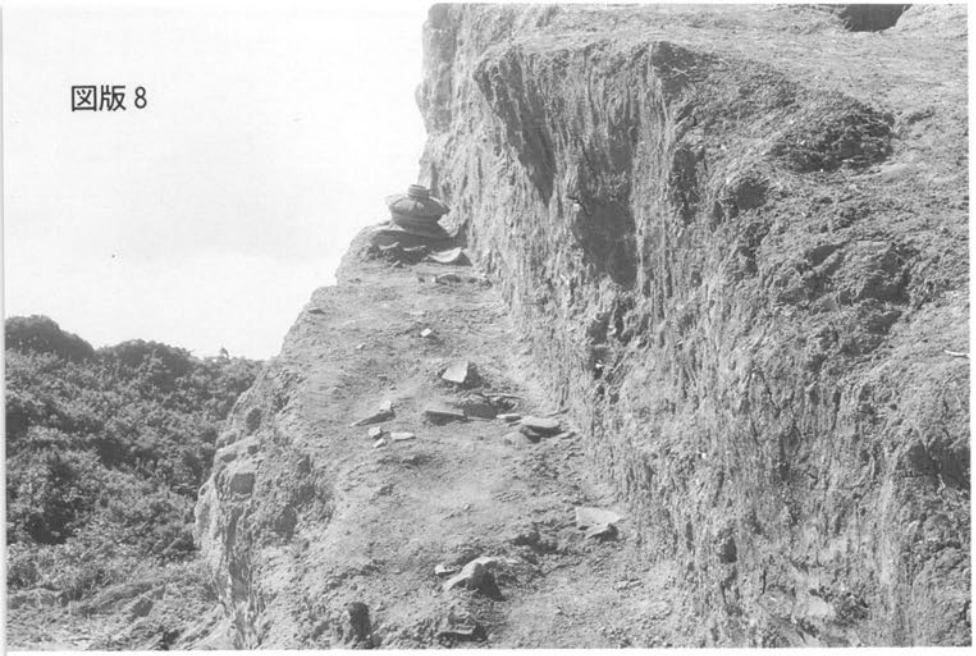
図版 6

窯跡断面

窯跡遺物出土状況近景

窯跡遺物出土状況(1)

図版 8



窯跡遺物出土状況(2)

窯跡遺物出土状況(3)

窯跡遺物出土状況(4)

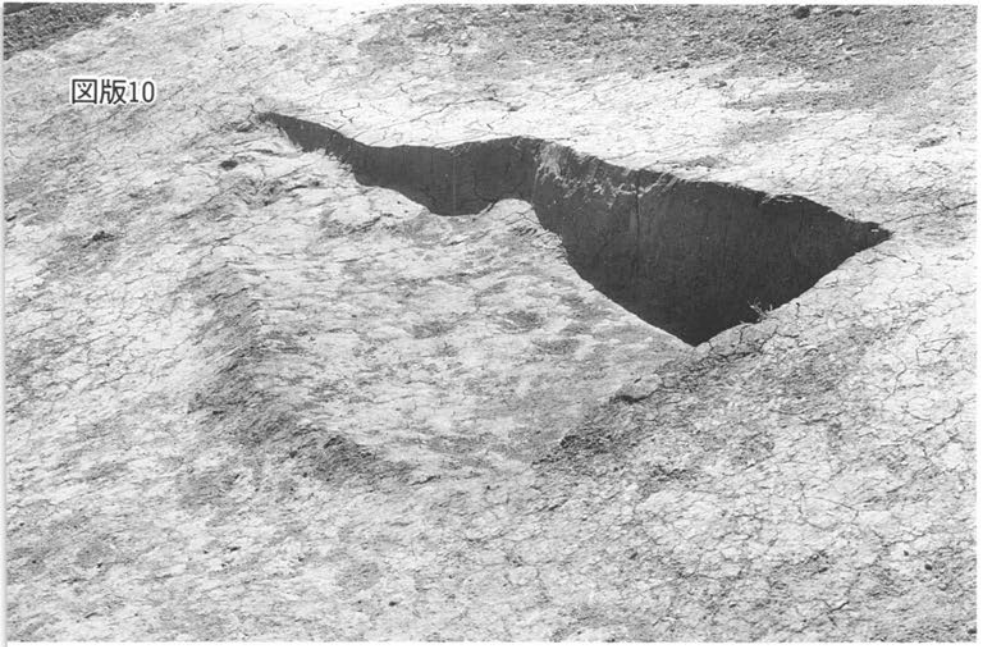
図版9

窯跡第一次焼成面

窯跡第一次焼成面全景

断ち割り状況

図版10



遺構Ⅰ

遺構Ⅱ

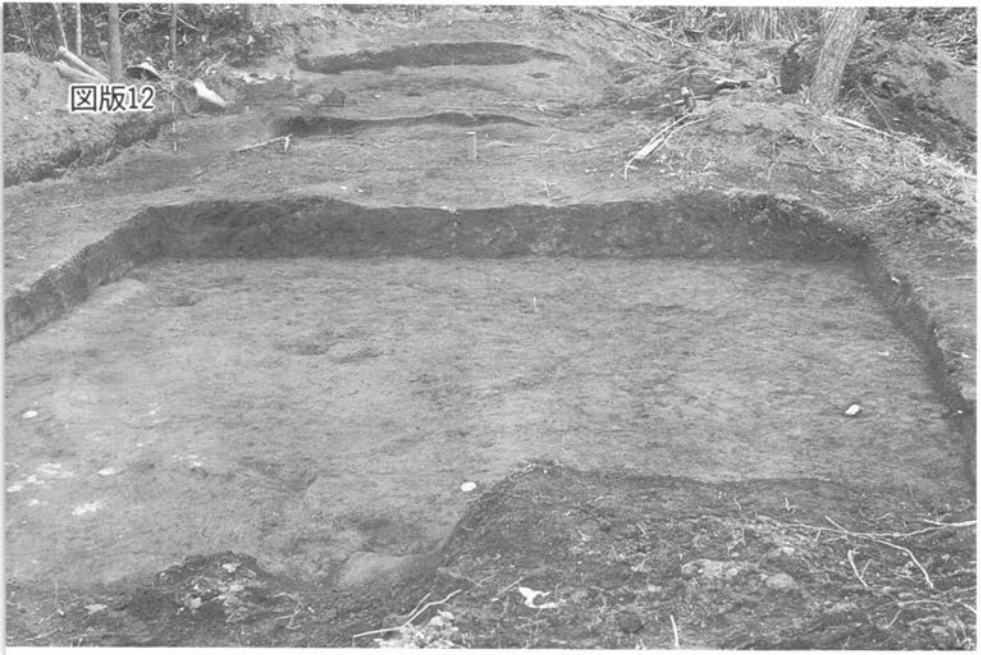
遺構Ⅲ

遺構Ⅳ

遺構Ⅴ

遺構Ⅵ

図版12



遺構Ⅶ～Ⅸ

遺構Ⅶ

遺構Ⅶ遺物出土状況

遺構Ⅷ

遺構Ⅷ遺物出土状況

遺構Ⅸ

蓋形埴輪 1

蓋形埴輪 2

馬形埴輪右側面

馬形埴輪左側面

図版16

馬形埴輪上面

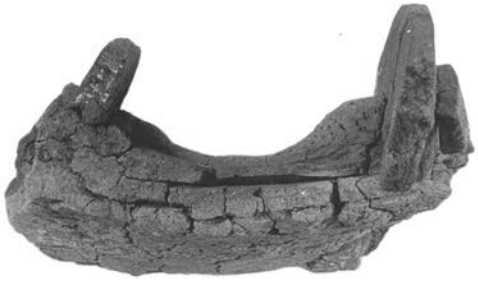
馬形埴輪
頭部

盾持武人形埴輪正面

盾持武人形埴輪後面

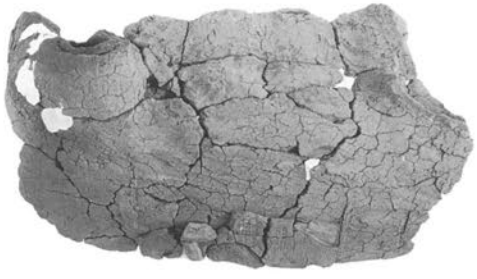
馬頭部①
馬鞍①

馬頭部②
馬鞍②



馬腹部内面①
馬腹部外面①

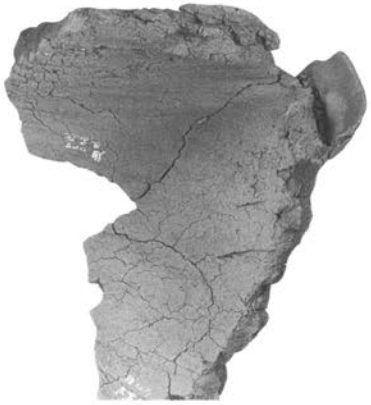
馬腹部内面②
馬腹部外面②



図版18

馬脚外面
馬尻尾

馬脚内面
馬臀部内面



盾持頭部内面①
蓋接続部

盾持頭部内面②
蓋内面

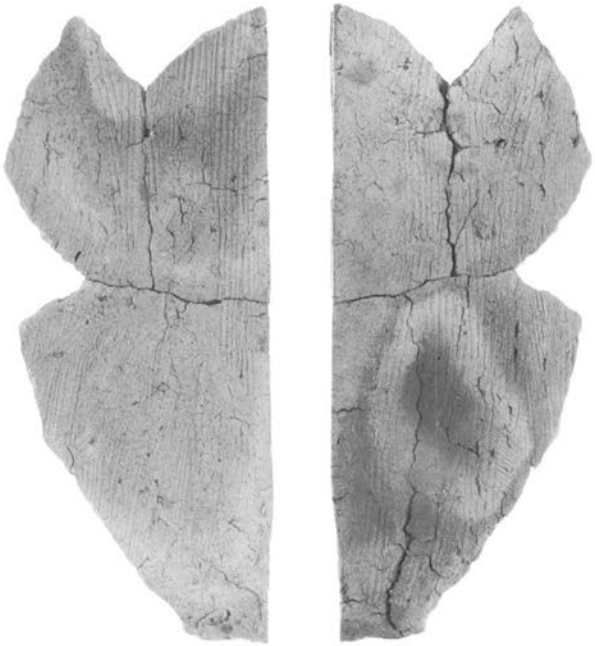
甕 2

甕 1

図版20

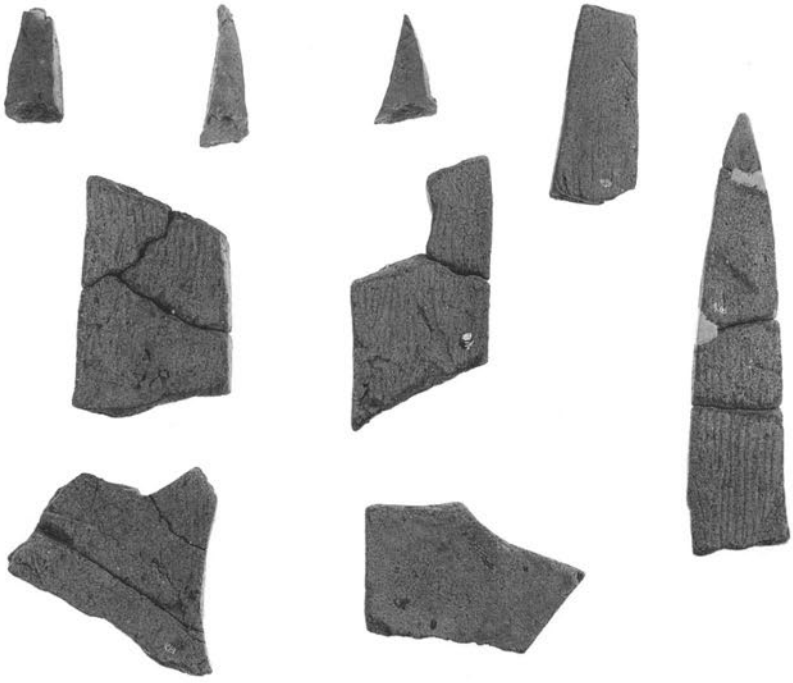
名称・形態不明の
形象埴輪 1

立飾り



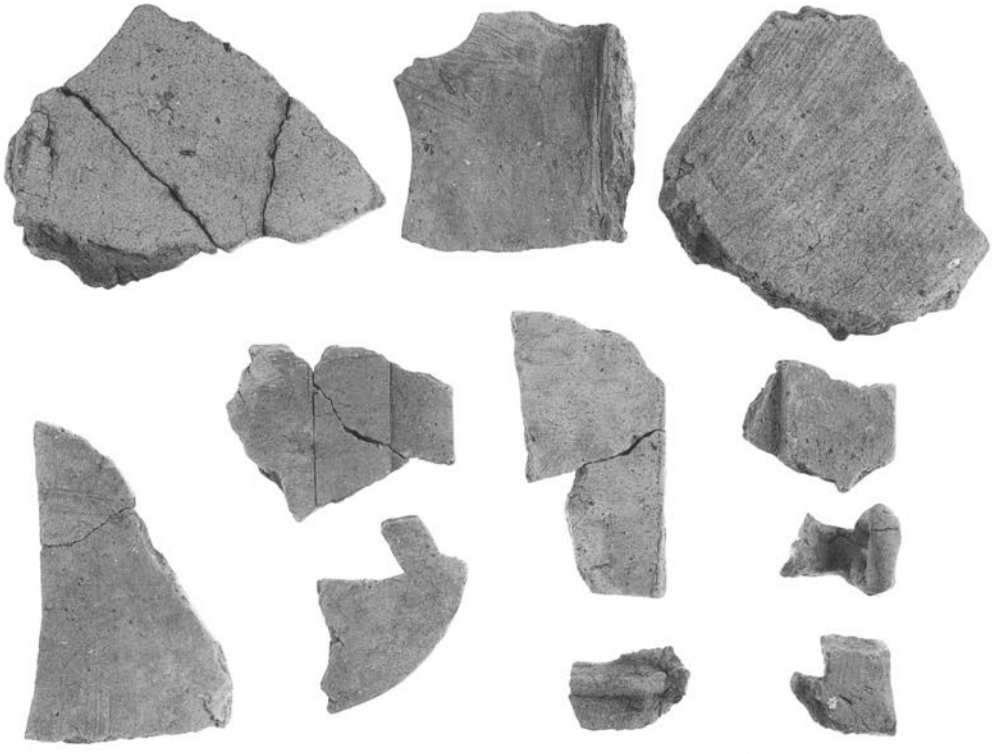
名称・形態不明の形象埴輪 2

形象埴輪基部



形象埴輪破片(1)

形象埴輪破片(2)

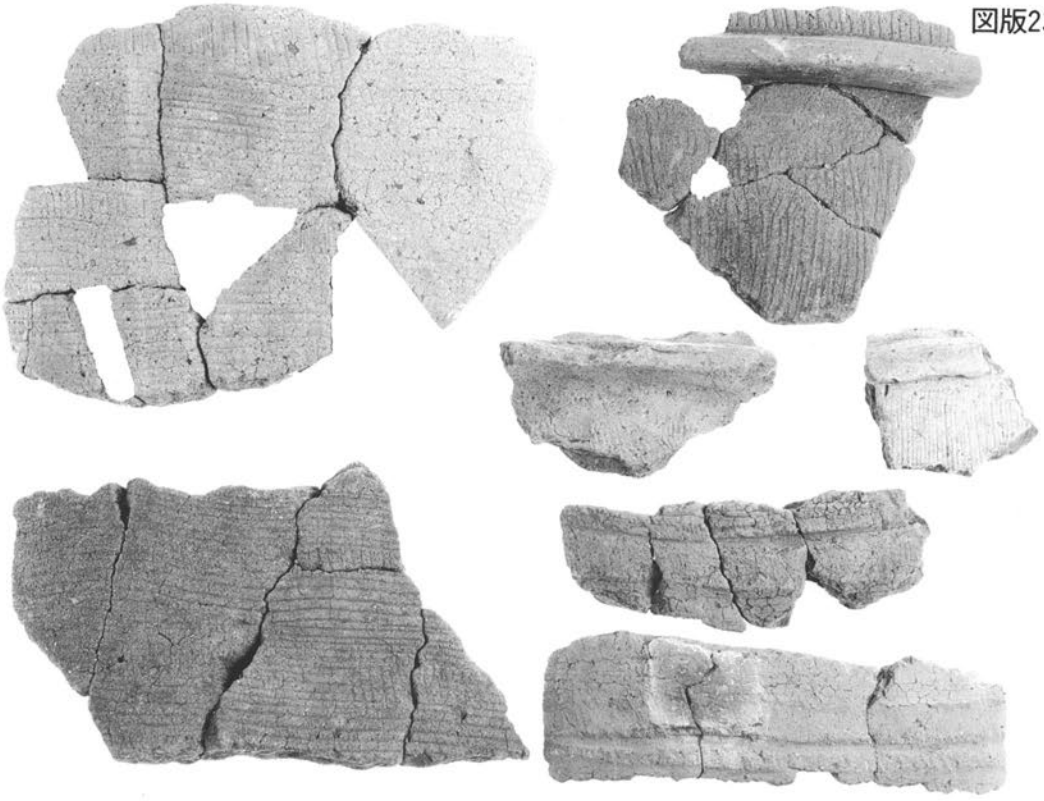


図版22

円筒埴輪 1

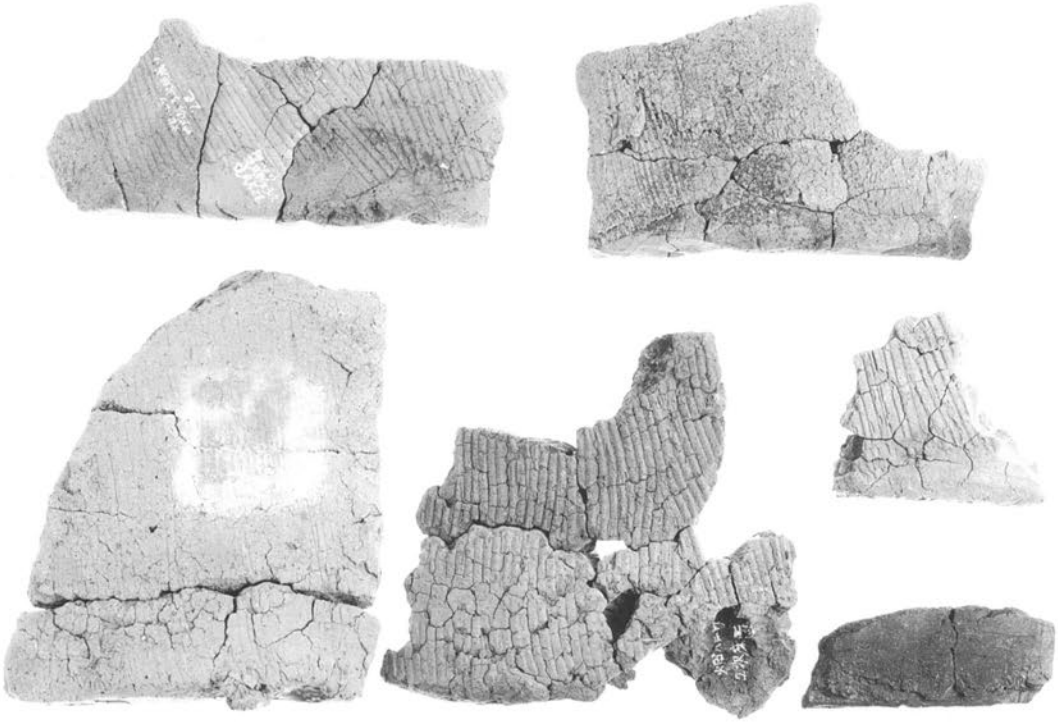
円筒埴輪 2

円筒埴輪口縁部破片



円筒埴輪胴部・突帯破片

円筒・形象埴輪底部破片

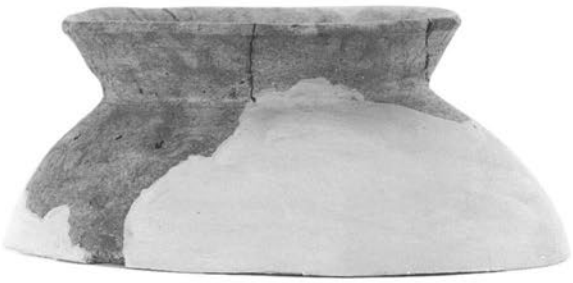


図版24

Ⅳ－1

Ⅳ－3

Ⅳ－2



Ⅳ－4

Ⅴ－2

Ⅶ－1

Ⅴ－3

Ⅶ－2

Ⅴ－4

Ⅶ－3

Ⅶ－4

Ⅷ－1

Ⅶ－5

Ⅷ－3

Ⅷ－2

Ⅷ－6

Ⅷ－4

Ⅷ－7

Ⅷ－5

Ⅷ－8

図版26

Ⅷ－10

Ⅷ－12

Ⅷ－11

Ⅷ－13

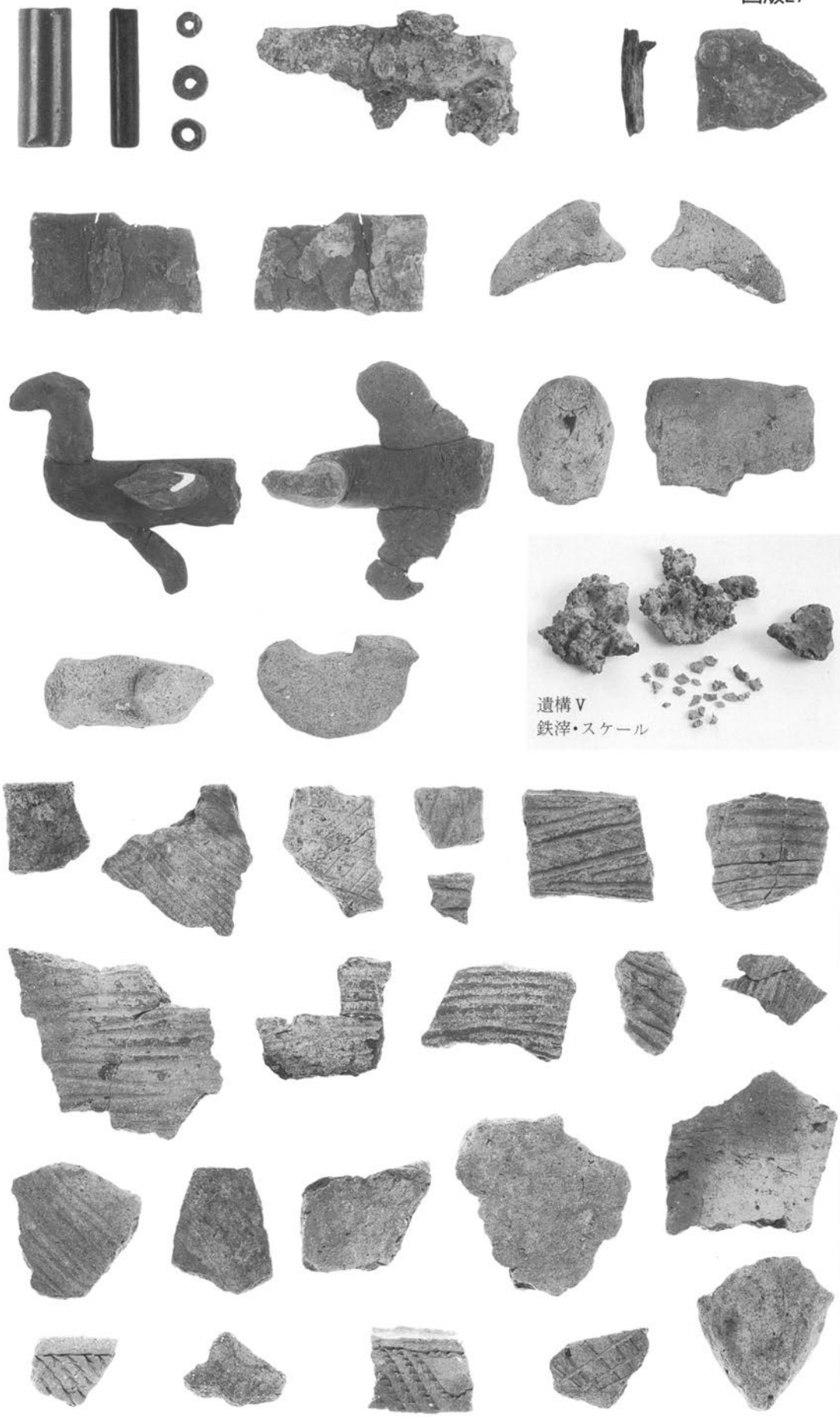
一括－1

一括－2

Ⅷ－14

一括－5

Ⅸ－1



遺構Ⅴ
鉄滓・スケール

千葉県文化財センター研究紀要15

平成6年3月31日　発　行

発行者　財団法人 千葉県文化財センター
千葉県四街道市鹿渡809－2
電話　043（422）8811

印刷所　株式会社 弘　文　社
市川市市川南2－7－2